

第34回 区民会議交流会 第2部全体会 パネルディスカッション【概要】

日時：平成20年11月10日（月）午後4時～5時

会場：横浜市技能文化会館 2階多目的ホール

●テーマ：「区民会議のあり方」について

パネリスト：保土ヶ谷区民会議

瀬谷区のまちづくり区民の会

横浜市長

コーディネーター：(株) 地域計画研究所 代表取締役 内海 宏

◆ はじめに

○内海コーディネーター

(1) 交流会テーマ「区民会議のあり方」検討の背景

昭和49年に最初の旭区民会議がスタートしてから、33年が経過した。発足当時から、区民が自主的・主体的に運営する区民相互の話し合いの場というコンセプトは変わっていないが、これまでは行政への要望・陳情という色彩が強かったと感じている。

しかし、この間、社会情勢の変化もあり、横浜市自体も人口360万を越す大都市になって、区の機能強化が進み、市民生活に一番密着した区役所の役割が非常に高まっている中で、広聴手段も多様になった。また、協働事業の広がりなどによって、市民参加の機会も拡大してきている。

非「成長・拡大」の時代の横浜で、区民会議も、今までのようなあり方だけではなく、社会状況に合わせた形で、新しく変わらないといけないのではないか。こうした背景から、この交流会で「区民会議の今後のあり方」について議論しようということになった。

既に活動を見直したところ、検討を始めたところ、区によって非常に違いはあるが、この交流会での意見交換を通じて、区民会議がどういう方向に向かって変わればいいのか、ヒントが得られたらよいと思う。

(2) 分散会での意見交換の状況

第1部の各分散会では、かなり多彩な議論が短時間で集中的になされ、区民会議の使命、役割が幅広く議論された。活動の財源についても、既に会費制を導入している中区、磯子区など、形態の違いが出ている。

一番議論になったのは、区民会議の機能については、広聴と提言、地域の課題解決の活動サポートなど、使命についてもバリエーションが出てきたこと。

また、共通して大きなテーマになっているのは、自治会町内会との関わり方をどうするかということ。自治会町内会と同じような役割を担うわけにはいかないの、どうすみ分けるかというのも一つの大きな切り口になる。

それから、ほとんどの区民会議は、1期2年で運営しているが、期ごとに活動内容が変わるのもどうか、区民会議として区民のためになることをするのなら、継続性を担保したほうがよいのではないかと、という意見が出された。

もう一つの論点は、自主性を持つべきかどうかについて。区民会議という一つの団体、組織となれば、当然NPOのように事務局を持って、代表がいる。今までは、広聴の仕組みの

中で区役所が事務局の役割を果たしていたが、今後、区民会議内で事務局を持つべきかどうか論点として提示された。

各分散会の中で提示されたことを、参加者がそれぞれ持ち帰って、今後のあり方検討に生かしてほしい。

1 現在の区民会議の活動状況

○内海コーディネーター

今日は、三つの論点で話し合いを進めたい。1点目は、現在の区民会議の活動状況について、現状報告をしてもらう。2点目は、地域との関係、あるいは他団体や行政との関係をどう築くか。分散会でもかなり大きな問題になっていたので、その話を中心にしてもらう。

3点目は、区民会議の役割をどう考えるのか。基本的に区民会議のミッションをどう考えるのかは、30周年記念交流会のとき、市長からも、「区民会議発」ということで、全市一律ではなく、区の状況に応じたあり方を想定した発言があったと聞いている。市全体というより、バリエーションがあっていいという視点で、区民会議の役割をどう考えるか話を伺う。

保土ケ谷区民会議 :

保土ケ谷区民会議は、広聴、提言、委員会・分科会活動を三つの柱としている。

広聴は、地域のつどいを年に6か所で、区民のつどいを年1回開いて、区民の声を直接吸収し、それを生かしていくこと。提言は、つどいで得た情報や意見、要望を行政へ提言すること。これは地域、行政、区民会議自身が考えるという三つに分類し、行政に依頼する事項をまとめて提案している。委員会活動は、運営委員会や広報委員会、正副代表者委員会等。分科会は、環境、教育、交通・災害、福祉の四つ。分科会活動は、従来より自主性を増し、研修会や学習会のほか、調査をして、その結果を学校等へ提言するなど、市民活動型に移行してきたと思っている。

さらに、情報発信としては、月1回、委員向けの「やまびこ通信」、年2回、区民向けの「やまびこニュース」を発行している。今年10月初めには、保土ケ谷区民会議のホームページも立ち上げた。

また、保土ケ谷区からは、「区民会議と区連会は区の両輪」と言われており、区が所管、主催する委員会や会議には区民会議枠があり、委員が出ているほか、イベントへの参加が非常に多くなった。それによって区政の一端を担う部分もあるし、そこに出ている他団体との情報交換にもなる。

保土ケ谷区民会議の活動は従来型だが、それをただ踏襲していくのではなく、チャレンジ精神を忘れずに進んでいこうと思っている。

瀬谷区のまちづくり区民の会 :

瀬谷区では、区民の会の委員から、達成感がない、従来どおりの活動でいいのかという話が出たこと、行政からも広聴の場は区民会議だけではない、今までと同じではなく、もう少し委員に達成感のある会にすることが、区全体を良くしていくことにつながるという話があり、前期は1年間休んで徹底的に区民会議のあり方を話し合った結果、新しい形でスタートした。

新しい区民の会は、今までどおり地域のつどいなどで区民の要望を聞き、それに合わせて、委員が区をよくするための課題を出す、その中で区民の会が取り上げ、プロジェクト方式で問題を精査し、実際に委員が調査研究等をしてきた結果を区役所に提言、提案していく形がいいということになった。同時に、事務局も全部区民会議でやることにし、行政も一緒に、今後、協働で会を進めるためにはどうしたらいいか話を進め、経費は、区から年間80万円を補助金としてもらう方式にした。

委員は公募と、各連合町内会から3人ずつ推薦された委員で構成。各種団体の委員は忙しく参加率が低かったので、プロジェクトスタッフとして入る。事務局は、総務委員会を設けて、全部自前でやることにした。区の役割は、会議室の手配や書類の受け渡し、情報収集。会議には必ず区の担当者にも出てもらい、区の情報には常にその場でもらう。

今、地域のつどいや委員から出た課題から、道路・交通、防災、ごみ・温暖化対策、環境、地産地消、米軍基地跡地利用のテーマで六つのプロジェクトが立ち上がった。何か月かに一度はプロジェクト同士の情報交換もしながらやっていくことになっている。

○内海コーディネーター

新しく船出した瀬谷区、既存のスタイルを踏襲しながらも創意工夫している保土ヶ谷区の報告があった。市長から感想を含めて、お願いします。

市長：

横浜市の地域を考える方法は、本来、いろいろなやり方があるが、それぞれバラバラに行われているのでは、まとまった横浜市全体の話には進んでいかないので、きちんと意見を集約し、きちんとした形で市に意見を反映させていくことが必要だ。

その一つが議会。議会は厳格なルールのもとにつくられる、市全体を考えていく上で一番オーソライズされた公式のものだ。一方、議会ですべての意見を吸収し、それを反映できるかということ、それは無理ではないかと思う。

なぜなら、それぞれの地域は違う。おそらく区の中でも地域に違いがあるし、当然、18区全体を見渡してみると、本当に区ごとに地域性がある。

それを行政は、どうしても中立公正にやらなければいけない。当然のことだが、同じ税金を払っているのだから、一部だけ優遇することはできない。

そうすると、例えば図書館などは、公平、中立に1区1館で進めてきたが、一方で、人口32万人の港北区と9万人の西区では違うという話になる。人口比を考えると各区1館は、ないだろうと。別の見方をすると中立性、公平性というのは一体何だろうという話になる。

全体に対しての一面的な中立性、公平性が必要なものもあるし、一方では、そこにとらわれていると逆に不公平ではないか、地域に応じた物の見方がされていないのではないかと、という案件もある。それを地域の中で解決していくには、やはり各区ごとにアクションを起こしていく、意見を集約していくことが必要になる。それが区民会議のあり方の今後の方向性としても、間違いなく問われることだと思っている。

長らく区民会議は広聴、意見を聞くツールの一つだった。広聴は今、多様化している。

例えば、いわゆるパブリックコメントという、施策の案を公表して、一定期間、市民の意見を聞く制度もある。また、最近では「市民からの提案(旧市長への手紙)」も、文書よりEメールで来るほうが明らかに数が多くなっているし、たらい回しにせずにつなぎ、答えるために設けた「横浜市コールセンター(664-2525)」もある。広聴手段が多様化したことは、私は、いいことだと思う。

その中で、横浜市の地域の課題解決という力は、はっきり言って、これまで、いま一つ弱かった。それに対して、どうアクションを起こすかということが横浜市の課題なので、それが区民会議のあり方を模索していく方向性と一致するならば、そうした課題に取り組むことも、一つのアプローチの仕方だと思う。

○内海コーディネーター

確かに区ごとの違いもさることながら、同じ区の中でも250メートルメッシュのデータで見ると、地域によって非常に大きな違いがあり、その違いに応じた公平性、平等性を保つことは、多分不可能に近い状況だ。だからこそ、区民会議のような団体が、地域と一緒にあって、あるいは区とも連携して活動できるようなら可能性がある。

2 地域との関係、他団体や行政との関係をどう築くか

○内海コーディネーター

2番目の論点の、地域あるいは他団体や行政との関係をどう築くかについて、話を聞いていきたい。

実際には、どういう関係のとり方をするかというのが非常に重要だし、自治会町内会と、どういう形で連携できるのかなども、かなり関心事だと思う。そういう視点で2番目の論点についての話を聞かせてほしい。

保土ヶ谷区民会議：

地域との関係では、保土ヶ谷区民会議で一番重要なのが、地域のつどいを自治会町内会と共催で年1回6地域で開催していること。ただ、現状では、自治会町内会はあまり積極的ではないので、今期、「地域のつどい検討プロジェクト」を立ち上げ、つどいの見直しとともに、連合町内会も含めた自治会町内会等との関係を、もう一度考えてみることにした。

地域のつどいは各地域では年1回開催だが、その時だけのつき合いではなく、常日ごろから関係性を培っていくことが大事と考え、終わった後も反省会をやることにした。さらに言えば、毎月の区連合町内会と地区連合町内会の定例会に区民会議委員も出席できれば、地域の問題を直に吸収していけるのではないかと。来期、実現できればと思っている。

また、地域との関係性を考えていくときに、エリアマネジメントが気になる。まだ、モデル事業※をやっている区は少ないが、これからの地域と区民会議の関係性において、エリアマネジメントというのは、重要なことになると思う。このコンセプトは、地域のことは地域の人が一番知っている。だから地域のことは地域の人たちで解決しようということ。そのときに、区民会議は、非常にやることが出てくると思うので、今後、何かリンクできればと思う。

(※身近な地域・元気づくりモデル事業：平成20年10月末現在、6区10地区で実施)

行政との関係性では、私は横浜市の長期ビジョンを策定するための「横浜国際港都審議会」に審議委員の一人として参加したが、そこでは「市民が主役」という言葉が非常によく出てきた。今は、もう行政イコール公共という時代ではなくなっている。公共や公共性というのは行政だけではなく、市民と一緒に作り上げていくところに協働の形もできると思うが、そのためには、行政と市民が対等である、という意識を持たなければいけない。

行政側が資金や場などを提供することが多い中で、昔はお上意識があったかもしれないが、何かをやってもらっている、やらせてあげているではなく、お互いが本当にイーブンで対等な立場でやっていくことこそ、市民とのパートナーシップが生まれる基本ではないか。市民だけが主役ではなく、行政も主役、ダブル主演で、すばらしい作品をつくっていこうという考え方でいったらどうかと思う。

○内海コーディネーター

地域との連携や、地域の取組を一緒になって考え、実践の道筋をつけることをやり始めたということだが、区民会議が自治会町内会と同じようなことをしたら「誰が主役なんだ」という話になり、暗礁に乗り上げるということも想定される。その辺は、地域との連携、関わりといっても、どういうスタンスに立つか。分散会でも、地域を越えた「とり持ち役」ならいいのでは、あるいは広域的視点を持つなどして、住み分けも議論する必要があるのではないかという意見も出ていたようだが、どうか。

瀬谷区のまちづくり区民の会：

地域のつどいで地域の人の意見を聞くと、大体、「こういうことがあるので何とかしてくれ」というのが多い。そうではなく、自分たちでできることは自分たちでやろうということをも前提に地域のつどいをもつ。その上で、地域ではどうしても解決できない問題があった場合に、区民の会でどうするかを考え、「行政に提案するもの」と「区民の会でしっかり受けとめてプロジェクトで研究していくもの」という分け方をする。

地域でできることは地域に返し、地域で区民の会のメンバーが一緒になって解決していくことを前提に地域のつどいをもつので、当然、そこで出されたさまざまな問題は、全部区民の会にあげ、その中で、地域でできることは地域でやってもらうこととして、地域から推薦された委員が持ち帰る。そして、地域でも手が出ない、あるいは全区的な問題になるかもしれないものは、プロジェクトで取り上げて調査研究し、行政に提案するなりしていくという形で地域との連携をとろうとしている。

地域のつどいは、地域から推薦された委員を中心に、当然のことながら、連合も一緒に共催でやっている。地区によっては、地域のつどいを地区連合の年間計画の中にきちんと盛り込んでいるところもあるぐらいだ。そうした関係は新しい区民の会になっても変わらない。

○内海コーディネーター

市長、話を聞いて感じたところをお願いします。

市長：

原則は当然、それぞれが各々の問題を解決できたほうがいいに決まっている。しかし、個人の問題でも、地域でしか解決できない問題というものもある。例えば、ある家の前にごみが散乱しているというのは、その人にとっての大問題。ところが、それは地域でないと解決できない。

一方で、地域の問題だが、行政が関わらないと解決できない問題もある。例えば、防犯で、ある家が空き巣に3回も狙われたとすれば、狙われたのは個人かもしれないが、みんなで不審者がいたらすぐ連絡し合おうという体制は地域でしか組めない。そして、そこに警察も関

わって、犯人を捕まえるとか、凶悪犯を見逃さないようにするためには、この場合は県になるが、行政が関わらないと無理だという話になる。

これは「補完の原則」とも言うが、それぞれの単位でできないことを補完し合って社会というのは成り立っていく。しかし、ともすると、一足飛びに個人と横浜市、個人と国の関係になったりするケースもいっぱいある。

先ほど、区民会議にも「これ、何とかありませんか」と、個人レベルの話を持ち込まれるという話があったが、横浜市でもひどい例がいっぱいある。この間、土木事務所に行ったら、「自転車の鍵を公園で落としたから一緒に探せ」とか、全く個人レベルの問題なのでそれは勘弁してくれという話が次から次へと来る。

だからこそ、区民会議が、それぞれの地域のやり方で、「補完の原則」をうまく組み立てていくことがポイントだと思う。先ほども申し上げたように、議会ではないから、やり方は統一する必要はない。それぞれのやり方でいいから、それぞれの地域でしか解決できない問題に、どう区民会議の活動が関わるか、ということだと思う。

○内海コーディネーター

「補完の原則」、それは逆に考えれば、区民会議のニーズは何だろう、あるいは区民は何を望んでいるのだろうかという点も、自分たちの使命、ミッションを考える上では非常に大事な問題。今、市長の言った補完し合うということも、一つの視点だ。それぞれ主体性を持って、どう一緒に組んでいけるかということなので、補完し合うという考え方が非常に重要だと、市長の話聞いて思った。

3 区民会議の役割をどう考えるか

○内海コーディネーター

最後に、区民会議の役割をどう考えるか。これからどうしようかと考えている委員にとっては、非常に興味ある問題。分散会でも一番大きなテーマだったかと思う。

保土ヶ谷区民会議 :

区民会議の目的、役割は、区民、市民が安全で、安心して、平和で、快適で、かつ心地よく暮らしていけるための活動、貢献だと思っている。

つい何日か前、仲間うちで、区民会議の今後をどう思うか聞くと、あってもなくてもいいという答えが返ってきて、ショックであるとともに、なるほどと思うところがあった。

それならどうすればいいか。なくてはならない区民会議になればいいのだと思う。区民会議でなければできないものやっつけていく、独自性というものを強めていけばいいと。自分たちだけが自己満足で認めるのではなく、区民や世間の皆さんが認めてくれるようになれば、区民会議はあってもなくてもいいのではなく、なくてはいけないことになる。それは何かというと、やっぱり人と人、地域と地域、それと市民、区民と行政の橋渡し役だと思っている。例えば、人と行政、一区民が思ったことの伝わりにくい部分を代弁するとか、A地域のことはA地域で解決できるが、A地域とB地域、C地域が一緒に何かやらないといけないうちに、

その仲立ちをするとか。

幸い、保土ヶ谷区民会議は、委員の出身母体が主な組織をほとんど網羅している。人材のジャンルが広いことと、地域も区内のいろいろな地域から出ているので、橋渡し役というのは非常に重要、かつ存在価値を認められる、独自性のある一つの役目になっていくのではないかと考えている。

区民会議というのは稀有な組織だ。これだけいろいろな人が集まって、いろいろなことをやっていく組織を、そんなにすぐ止めたり、潰したりできるものではない。今後も存続していくべき価値があると思う。これからも区民会議ならではの、区民会議らしさという独自性を失わず、人と人、地域と地域、区民と行政との橋渡しを役割とし、区民が何かやりたいと思っても、それを実現させるのはなかなか難しいが、実現へ向かってのきっかけをつくったり肩を押したりする存在になれたらと。それを広く区民の皆さんが認めてくれれば、おのずから区民会議は長く続いていくのではないかと私は信じている。

瀬谷区のまちづくり区民の会 :

分散会でも出たが、区民会議委員は、自分たちの区を、いかに住みよい区、幸せな区にしていけるか、そのために、皆さん手を挙げて区民会議の委員になっているはず。ということは、そういうところを目指していくのが、区民会議の共通の目的ではないかと考えている。ただ、その目的を達成するためには、さまざまな方法があり、私は、これはこうあるべきだという方法を限定する必要はないと思う。

最後に、私たちの分散会でこういう意見が出た。区民会議は2期1年なので、そこで終わってしまうのではなく、後に何をどのように残していくかということが、とても大事だと。確かにそうだ。

私たち人間は、生きている今をむさぼればいいのではなくて、後世に何を、どれだけのものを残していくか、その責任を持って今生きている。基にあるものは、そこだと思う。だから、その上に立って、もちろん区民会議もある。そして区の中で、地域でもできないこと、連合でもできないこと、そして区では少し目が届かないこと、そういうものを自ら見つけ出しながら、うまく課題の解決に向けて提案していくというのが、私は区民会議の役割ではないかと考えている。

○内海コーディネーター

区でもできないこと、区民でもできないこと、区民会議ならではの行いをどういうふうに見定めて、これから継続した活動にしていけるか、ということが非常に大事だと思う。

市長は、いかがか。

市長 :

一つは、先ほど言ったように、行政にしかできないことはいっぱいある。特に地域の中のインフラ整備や基本的サービスの整備など、これは行政にしかできない。そのために税金を預かっているのだから、これはしっかりとやらなければいけない。

一方で、自治会町内会は、それぞれの地域の中で頭が下がることをやってくれていて、本

当にありがたいと思う。今だんだん希薄になってきた運動会や文化祭をやったり、コミュニティをつくったり、防犯活動や、日ごろから自治会報を出して、いろいろなものを回覧板などで情報共有をさせていただいている。

また、一方では、NPOというのを最近よく聞く。ではNPOというのとは何かというと、自治会町内会が地つきであるのに対して、NPOは課題つき、例えば青少年育成や環境、緑化など、課題に足元を置いている。これも市民の力を発揮してもらいたいと思うところ。他にも学校とかいろいろあると思うが、やはりそれぞれに性格が違う、そしてここに区民会議がある。そうすると、区民会議は、ある意味その全体にかぶるような働きも可能になるし、そうした役割を果たしていくことも、一つのやり方、あり方ではないかと思う。

私は自治会町内会と課題型のNPOは、もっと地域の中で融合していく必要があると思う。しかし、このことも、行政が間に入って「融合してください」と言うのも難しいので、こういうところで、区民会議も一緒になって考えてもらえるありがたい。というよりも、一市民の側に立ったときに、そういうところに区民会議への期待があるのではないかと思う。すなわち、性格が違うものが地域を構成しているところで、区民会議は、どんな性格づけでやっていくのかという提起が一つ。

それから、民主主義を考えると、「地方自治は民主主義の学校である」という有名な言葉がある。まさに、こういうことを活発に議論したり、地域の中でどういうふうにしよう、「あなたはと思う」「あなたは」と話し合っ、最終的にはどのくらいの人かそう思っているのか意見をまとめたり、こういうこと自体が、まさに今言った、「地方自治とは民主主義の学校である」ということになる。私はこのことを重く捉えて、今後のモデルを横浜の中でつくっていき、つくってほしいと思っている。

どういうことかという、協働という言葉は概念としてはあったが、協働を進めることに、横浜市は、はっきり言って積極的ではなかった。私が市長に就任して、協働だ、協働だと言いはじめても、職員は、はっきり言っておっかなびっくりだった。

というのは、職員の側からすると、市民にいろいろな意見を聞いて、市民に入ってもらいやり方をして、うまくいった例もあるが、結構嫌だった例もいっぱいあった。なぜなら一つの意見にこだわって、それを聞いてくれなければ私は嫌だとか、しつこくそれだけに固執しているような人も時々いるので、そういう目に遭うと、市民の意見を聞いても、結局長引くだけで、一部の人に引っ張られてどうにもならないというような経験が残ってしまっている職員もいっぱいいた。

しかし、それを前進させていかないと、これからの地域の課題解決はできないから、協働は絶対に進めていくという方針でこれまでやってきているが、やはり、まだまだ日本の中では、地域課題の解決ということを含めた民主主義は未成熟な部分があると思う。

ここを成熟させていくことも、これからの日本社会の課題だ。地域の課題には全然参加しない、働きに出て帰ってくるだけ、あるいは地域にいる人でもあまり熱心に参加しない。別に熱心に参加してくれというのではなく、少なくとも関心を持ち、課題の共有をしようというぐらいまではしないといけない。そうでないと、それぞれ個別に、さっき言ったように、横浜市のコールセンターに電話をかけて、何とかしてくれだけの意見になってしまう。

だから、今言ったように民主主義を成熟化させていくということも、区民会議が考えて、担って、あるいは方向性として議論していく、一つのあり方だと思う。

それから、最後に、今、横浜市は、大都市制度問題を国に提案するため、大阪市と名古屋市と一緒に研究会を設けてやっている。新聞で見た人がいるかもしれないが、これは何かというと、横浜市365万人は、はっきり言って大きい。大き過ぎると言う自己否定のようになってしまいが、市長をやっていると、これは本当に大きい。「市長さん、あなた知っていますか」と、路地裏の話をされても市長は知らない。そういう実態は目の前にいっぱいある。

そのことを考えたときに、やはり市民レベルの視点で大都市制度も考える必要がある。もちろん経済やいろいろな視点からも考える必要があるが、市民レベルでも考えていく必要がある。大都市制度とは、どういうことかという、東京なら制度は違うが23区があり、そこには区議会があり、区長も選ばれる。しかし、横浜市では、区長は、公選で選ばれるわけではない。そういう根本的な問題は論じるべきだ。一人の市長が365万人という中で、果たしてこれで本当に大丈夫かといったら、私は一生懸命頑張っているつもりだ。けれど、本当にこれは大き過ぎるという問題もある。そういう意味では、区議会を設けたりとか、区長を選んだりとかいうのも、大都市制度を考えていく中では必ず大きな課題として提起していく必要がある。

そこで、同じような規模である大阪市、名古屋市と一緒に研究会をつくっている。大阪も名古屋も人口200万人台だが、それ以外の政令市は100万人台、70万人台だったりするので、大阪と横浜と名古屋の3市でやっている。そうしたときに、さて、区をどうしていこうという議論をすることも、区民会議の方向性としては一つあるかもしれない。以上三つを申し上げた。

◆ まとめ

○内海コーディネーター

これから「区民会議のあり方」を検討する際の三つの論点という形で提示があったと思う。最後に、皆さんの話を聞きながら感じたところを少し話したい。

区民会議はもともと自分たちの手で自分たちの町をよくしていこうという志を持った人が集まった場であることは間違いない、そのことは、今日の間でも明らかになった。それでは何をすべきか、あるいは何ができるのかということは、幾つか今日の発言の中でヒントが出されたと思う。

私自身が感じた点は3つある。一つは区民との協働。例えば区の中に各種団体もあり、自治会町内会という、地域の運営を本当にボランティア精神で、日常的に非常に義務感強くやっている団体がある。それからNPOの人もある。その人たちの一つひとつの努力の積み重ね、あるいは思いがうまく実になるようにしていく、横つなぎをするという機能が区民会議の中では非常に重要なのではないか。区民同士を束ねていくという組織は、今のところない状態なので、そういう役割、機能も非常に重要だと感じたのが1点目。

それから2点目は、行政との協働。市の「区民会議事務取扱要綱」がなくなって、どうなるか分からない、今、置かれている状況は厳しいという話も今日の分散会で出たが、例えば、行政からお金がもらえる、もらえないという問題も、単純に力関係で決まっているわけではなくて、公的な役割を担っているのかどうか、あるいは担えるような存在として、きちんとミッションを見つけ出すかどうかだ。そこがないと、区民からも認知されない。今日の議論にもあったように、区民からも認知された存在になりたいという思いは分かるが、そのためには公的な役割、新しい公共の担い手としての役割をどこまで打ち出せるかという問題も、これからの議論の中で、きちんと詰めてほしいというのが2点目。

それから3点目は、自主的・主体的な運営。今日も財源の問題が出たが、瀬谷区でも総務委員会という自前の事務局をきちんとつくっている。普通は、NPOの組織もそうだが、事務局がきちんとしていないと、代表がいても、いい人材がいてもうまくいかない。メンバーを束ねて、一つのミッションとしてきちんと機能するようにするためには、やはり事務局というのは非常に大事だと思っている。事務局の体制や財源の問題も、自主財源の問

題だけではなくて、公的な役割を担うので公的な資金が使える、あるいはそういう場面がなければ、活動助成金を、民間のものでもいいので、自分たちのミッションに沿った形でとってくるぐらいの気持ちも、少し視野に入れた取組になっていくといいなど、皆さんの話を聞いて感じた。

最終的には、従来の区民会議の姿から一歩も二歩も進んだ、新しい時代の、新しい形の区民会議として、皆さんの力でぜひ船出をしていただき、これから、ますます住みよい、安全で安心できる街になるよう、頑張っていたいただければと思う。